

幼児教育の独自性の視点から幼小連携を考える

長崎大学教育学部 教授 井口 均

1. はじめに一2つの問題提起一

2007年改正の学校教育法で幼稚園は学校種の最初に位置づけられた。しかも、「幼稚園は、義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」(同学校教育法、22条)と記載された。これによって、大きく2つの問題が投げかけられたことになる。1つは、幼稚園でどのような力を育てることが「義務教育及びその後の教育の基礎を培う」ことになるのか、という問題である。もう1つは、幼小の連携のあり方をどのように考えるか、その基本的あり方についての問題である。

2. 義務教育及びその後の教育の基礎となる力とは

義務教育及びその後の教育の基礎となる、幼児教育による学びの内容は何か。幼小連携を考えた場合、この問題は避けて通れない。

その問題に言及する前に、小学校以降の学びについてふれておく必要がある。その基本形態は授業であり、「遊び」とは一線を画している。授業は時間が決められ、教科別の知識・技能が系統的に理解していけるように進められる。授業で子どもに示される問い(問題)とその正解がある。教師はその問いと正解を事前に知っており、問いと正解を子どもが自発的に探究するよう、またその探究過程をより面白くするため、発問、資料提示、討論などを工夫する。

その学びは、基本的に教師主導でありながら、子どもの探究心や意欲を引き出し、子どもが自発的に問いとその正解を見出す過程として演出される。それゆえ、教師は各教科の専門知識だけでなく、子どもにとって既知の知識や思考方略に関する把握も求められる。問いとその正解を発見するまでの子どもの思考過程を、事前に何パターンかシミュレーションできるという意味でも、授業は教師主導である。

義務教育及びその後の教育の基礎となる力とは何か。少々乱暴な展開だが、私見を述べれば、次のようになる。まず、基本的な生活習慣の自立である。授業を中心とした日課の流れは細切れる的になり、生活面での自立性が求められる。知的な好奇心と探究心を発揮し、考えたことや気づいたことを言語的に表現するコミュニケーション力も求められる。姿勢・動作を維持し、注意を特定の対象に向ける集中力と自制心も必要である。問いを共有し、問題解決へのすじみちを仲間と協同・協働して見出す力などこそが、基礎となる力である。これらが、小学校以降の教室における授業を中心とした学習活動や生活を支える、と考える。

3. 幼小の連携・接続のあり方

義務教育及びその後の教育の基礎となる力を、幼児教育では授業と異なる「遊び」を中心とした園生活全体を通して学ぶ。この点が、幼児教育の独自性であり、幼小連携及び接続のあり方考える際の基本となる。

幼稚園や保育園で小学校における授業で必要となる準備的教育や先取的教育をすることが、幼小の連携及び円滑な接続を達成する本質的な解決策ではない。準備的教育や先取的教育は、例えば椅子に座って先生の話が聞けるとか、文字の読み書きができて自分の名前が書けるとかなどを問題にすることが多い。その根底にあるのは、小学校以降の教育で必要となる学習態度（姿勢）や学習しなければならぬ各教科の具体的知識・技能を前倒的に訓練し、早めに「できる」ようにしておけば、円滑な接続が可能となるという考え方である。全面否定はしないが、準備的教育や先取的教育が過度なまでにエスカレートし、早めに「できる」こと自体が価値のあるかのように、一人歩きしてしまうことの方がむしろ問題である。

それと密接不可分な関係にあるのが授業評価である。教科中心の授業での学びは、子どもの学びの成果を点数化する一面をもつ。観点別評価により、点数化は知識・技能だけではないという見方もできるが、主には知識・技能の量、つまり客観的評価として測定できる力が先取りされることになる。それは幼児教育の独自性を見失うことを意味し、幼児期を単に準備段階として正当化しようとしているに過ぎない。

より本質的な解決策は、むしろ小学校以降の教育での授業のあり方を見直すべきである。授業の中で、子どもの問題解決への必要性を引き出し、教師と子どもたちの協同・協働による問題解決が展開されることである。要は、幼児教育における小学校的授業の先取りでも、小学校での授業の遊び化でもない。遊びにおける学び方を小学校以降の教育で継承することこそが、幼小で連携されるべき内容ではなかろうか。義務教育及びその後の教育の基礎となる力は、遊びを中心に、生活の中で獲得される。その過程は、自分なりの意味づけや仲間同士での「折り合い」あるいは「教え合い」という関係性を基本に展開する。予め明確な正解があるわけでもない。

4. 最後に「遊び」と生活での学びのストーリーを読み解く取組みへの期待

保育を参観した小学校以降の学校教師が一樣に言うことは、「園では、子どもがそれぞれ好きな遊びをしているだけではないか」である。それに対し、保育者は「遊びの中で、子どもは様々なことを学んでいる」と、具体的に「できる」ようになった行動現象を挙げ連ねてでしか言い返せない現実もある。

義務教育及びその後の教育の基礎となる力の獲得を具体的に説明でき、幼児

教育の独自性に沿った子どもの評価・理解と援助・指導のあり方を検討していかなければならない。その方法は、小学校以降の教育で一般的な、目に見えるかたちでの、客観的な「できる・できない」を基準にした評価と異なって当然である。

子どもの育ちは、様々な活動体験が織り込まれ、モノや他者とのかかわりを通して形づくられ、その子なりの意味づけを伴った個別的で内面的な学びのストーリーとして具現化される。その学びを把握するには、まず、子どもを自分から「~しようとする」存在として捉え、その子の個々の行動の意味づけと問題解決過程を多面的見方によって読み解くことが必要となる。そのことは結果として、子どもを肯定的に捉えることでもある。意欲的な実践研究として、1年目の成果に満足している。